

矢加部町屋敷遺跡

－福岡県柳川市矢加部所在近世集落の調査－

柳川市文化財調査報告書 第17集

2023

柳川市教育委員会

矢加部町屋敷遺跡

－福岡県柳川市矢加部所在近世集落の調査－

柳川市文化財調査報告書 第17集

序

筑後川と矢部川が有明海に注ぐ筑後平野南西部に位置する柳川市は、柳川藩十一万石の城下町であり、詩人北原白秋の詩歌の母胎となった水郷都市です。

このたび報告をいたします矢加部町屋敷遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還」沿いに位置している久留米藩領の集落遺跡です。令和3年に県道久留米柳川線拡幅工事に伴い、柳川市教育委員会が発掘調査を実施いたしました。その結果、廃棄土坑、柱穴など、集落跡を現在に伝える遺構が確認され、出土した陶磁器や、土製品、金属器等と合わせて、近世往還道「久留米柳川往還」沿線の、久留米藩領の集落遺跡の変遷を明らかにする手がかりとなりました。

本報告が今後の調査研究に寄与すると共に、埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護に対する取り組みの一助となることを願います。

最後に、今回の調査にご理解を頂きご協力頂きました地元の皆様を始め、調査にあたりご助言ご指導を賜りました皆様、発掘調査に従事して頂きました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和5年3月31日

柳川市教育委員会
教育長 沖 毅

例 言

- 1 本書は、県道久留米柳川線拡幅工事に伴い、福岡県南筑後県土整備事務所より柳川市教育委員会が委託を受けて発掘調査を実施した、柳川市矢加部所在 矢加部町屋敷（やかべまちやしき）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は柳川市教育委員会が事業主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課の橋本清美が調査を担当した。
- 3 本書に掲載した遺構実測に用いたグリット杭の設置は株式会社埋蔵文化財サポートシステムの伊藤博樹が、遺構実測図の作成は調査担当者が行った。遺物実測図の作成は株式会社九州文化財研究所が行った。
- 4 本書に掲載した空中写真撮影は有限会社空中写真企画の諫山広宣が、遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は九州文化財研究所が行った。
- 5 遺物の整理復元は西美智代、野口宏美、大津幸代、石井朝子、牧之角健太が行った。
- 6 遺物、遺構の製図は九州文化財研究所が行った。
- 7 出土遺物、写真、実測図は全て柳川市教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆、編集は橋本清美と九州文化財研究所の加藤悠作、金子史雄が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	4
1	遺構面検出遺構	4
2	その他の出土遺物	23
IV	総括	32

図版目次

図版1	1	矢加部町屋敷遺跡調査区範囲遠景（北から）
	2	矢加部町屋敷遺跡調査区範囲全景（東上から）
	3	第1調査区全景（東上から）
図版2	4	第2調査区全景（東から）
	5	第3調査区全景（東から）
	6	第4調査区全景（東から）
図版3	7	第1調査区第2遺構面完掘状況（北から）
	8	第1調査区第2遺構面完掘状況（南東から）
	9	第1調査区東側壁面土層堆積状況（南西から）
図版4	10	第2調査区西側壁面土層堆積状況（東から）
	11	第4調査区西側壁面土層堆積状況（南東から）
	12	S-1完掘状況（東から）
図版5	13	S-9完掘状況（南西から）
	14	S-12完掘状況（東から）
	15	S-14完掘状況（北から）
図版6	16	S-15完掘状況（南東から）
	17	S-31・S-35完掘状況（西から）
	18	S-32完掘状況（南西から）

- 図版7 19 S-34完掘状況(西から)
20 S-36完掘状況(西から)
21 S-41完掘状況(北から)

図版8 出土遺物①

図版9 出土遺物②

図版10 出土遺物③

図版11 出土遺物④

挿 図 目 次

第1図	柳川市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
第3図	調査区位置図(1/2,500)	3
第4図	矢加部町屋敷遺跡遺構配置図(1/250)	6
第5図	矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第1調査区遺構配置図(1/40)	7~8
第6図	矢加部町屋敷遺跡第1調査区土層図 東側壁面(1/40)	9
第7図	S-1からS-10実測図(1/40)	10
第8図	S-1・2・4出土遺物実測図(1/3)	11
第9図	S-11からS-16実測図(1/40)	13
第10図	S-9・10・12・13・16出土遺物実測図(1/3)	14
第11図	S-16出土遺物実測図(1/3)	15
第12図	S-20・21・23出土遺物実測図(1/3)	16
第13図	矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第2調査区遺構配置図(1/40)	17
第14図	矢加部町屋敷遺跡第2調査区土層図 西側壁面(1/40)	17
第15図	矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第3調査区遺構配置図(1/40)	18
第16図	矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第4調査区遺構配置図(1/40)	19
第17図	矢加部町屋敷遺跡第4調査区土層図 西側壁面(1/40)	20
第18図	S-18からS-21・30・40実測図(1/40)	21
第19図	S-41からS-43実測図(1/40)	22
第20図	S-31・35・43出土遺物実測図(1/3)	22
第21図	矢加部町屋敷遺跡第2遺構面第1調査区遺構配置図(1/40)	25~26
第22図	その他の出土遺物実測図①(1/3)	27

第23図	その他の出土遺物実測図② (1/3).....	28
第24図	その他の出土遺物実測図③ (1/3).....	29
第25図	その他の出土遺物実測図④ (98・99は1/3、100は1/4).....	30
第26図	出土銭実測図 (1/1).....	30

表 目 次

第1表	出土遺物観察表.....	34～36
-----	--------------	-------

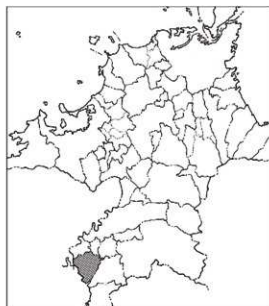
I はじめに

1 調査に至る経過

福岡県柳川市は筑後川と矢部川とに挟まれた筑後平野の南西に位置する、人口約63,000人、面積77.15平方キロメートルの地方都市である。市南部には近世以前から戦後まで造られた広大な干拓地が広がる他、本市を含む筑紫平野南部一帯には、水田の灌漑水用の水路が網のように巡り、独特の景観を形成している。

今回、県道久留米柳川線拡幅工事が計画されたことに伴い、令和3年1月19日に文書により埋蔵文化財の有無について照会を受けた柳川市教育委員会が、令和3年2月19日、令和3年2月24日、令和3年5月6日に試掘調査を実施した。その結果、近世の遺物を伴う遺構面を確認したため、当地が近世の往還道「久留米柳川往還」沿線の久留米藩領の集落遺跡に関連する遺構であると判断し、その後の協議を始めた。

数次の協議を経て、開発予定地において道路拡幅工事により遺構が破壊される範囲で発掘調査を行うこと、調査費は事業者である南筑後県土整備事務所から支出することを合意し、文化財保護法による諸手続きを経て令和3年7月20日に福岡県南筑後県土整備事務所と柳川市との間で矢加部町屋敷遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。



第1図 柳川市位置図

2 調査組織

発掘調査及び報告書作成の関係者は次のとおりである。

			令和3年度	令和4年度
総括	柳川市教育委員会	教育長	沖 毅	沖 毅
		教育部長	袖崎 朋洋	袖崎 朋洋
		生涯学習課長	新開 文隆	新開 文隆
		生涯学習課長補佐	三小田 祐輔	田中 規之
		文化財保護係長	三小田 祐輔(兼)	田中 規之(兼)
		文化財保護係	堤 伴治	橋本 清美(整理・経理担当)
		会計年度職員	橋本 清美(調査・経理担当)	川嶋 大輝
福岡県南筑後県土整備事務所	所長		牧之角 健太	牧之角 健太
			原田 昌宏	田尻 英樹

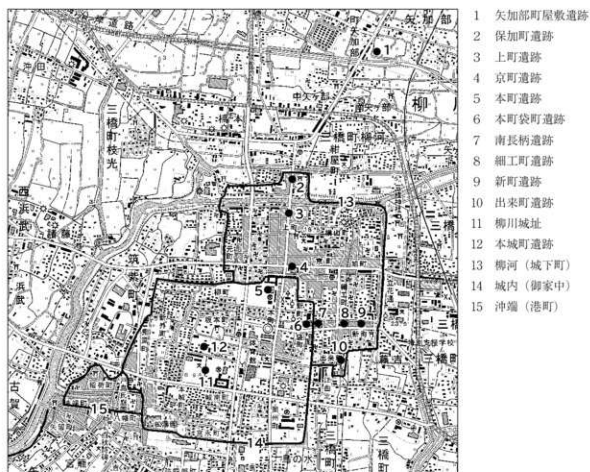
なお、発掘調査及び報告書作成の期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。
(順不同、敬称略) 福岡県教育庁総務部文化財保護課、九州歴史資料館

Ⅱ 位置と環境

矢加部町屋敷遺跡は、柳川市の中央部からやや北寄り、柳川の中心市街地の隣接地に所在する、近世の往還道「久留米柳川往還」沿線の久留米藩領の集落遺跡である。本遺跡は有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴い、平成15年10月の試掘調査により江戸時代の溝や土坑などが確認されたため、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。当遺跡は、九州歴史資料館によって平成16年から平成19年9月の間に5次調査まで実施されている。今回は柳川市教育委員会が令和3年から調査を実施した矢加部町屋敷遺跡の調査報告である。

本遺跡が所在する柳川市は筑後平野南西部の有明海北縁にあたり、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地し、標高0～5m程度の平坦な低平地である。柳川市に面する有明海は干満差の激しい国内有数の干潟を有し、沿岸部には干拓地が広がる。柳川城の城郭を形成する城堀は、城下町の東辺にある3ヶ所の水門から二ツ川の水を取水して水路で繋ぎ、さらに城堀の南岸に複数の取水口を備え、二ツ川から市南部の宮永地区及び両間地区に再分配するための中盤施設の役割を果たす。

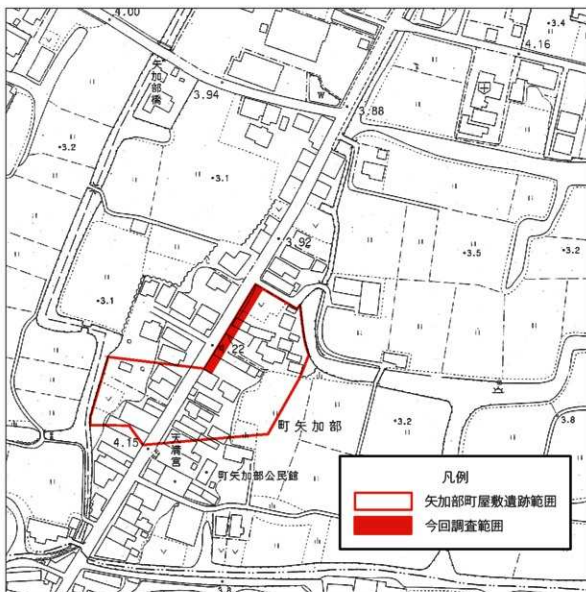
天正15(1587)年、立花宗茂が柳川城に入り、三藩・下妻・山門の三郡を支配した。慶長5(1600)年に関ヶ原の戦いで西軍に与した宗茂が改易されると、田中吉政が筑後国の領主として柳川城に入る。しかし2代忠政に後嗣が無く、断絶改易となった。そして元和6(1620)年、立花宗茂が再封され、以後幕末まで立花氏の支配が続いた。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

近世柳川城下の構造は地理的な関係から、柳川城を中核に武家が集中する「城内」と通称される地区と、町人が主に居住した「沖端町」と「柳河町」の三地区に大別することができる。

矢加部町屋敷遺跡は近世の往還道「久留米柳川往還」沿線の集落遺跡であり、近世柳川城下町と近世久留米城下町を結ぶ交通の要所に位置した久留米藩領の集落遺跡である。当遺跡が面する県道久留米柳川線は、現在も柳川市と久留米市を繋ぐ、幹線道路である。



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ 調査の内容

矢加部町屋敷遺跡の発掘調査は、令和3年9月1日から作業に必要なプレハブ等の搬入を開始し、令和3年9月2日より重機による表土掘削を開始した。調査にあたっては、安全に考慮し調査を行った。遺構密度はそれほど高くないが、調査区全面にわたっており、全体図を1/20縮尺で実測し、各遺構のレベルを入れる作業を行った。また主要遺構については個別に実測図作成を行い、写真撮影も行った。調査が終了したのは令和3年11月5日である。

調査範囲は東西45m、南北55m、1区のみ2面調査を行い、総調査面積は500㎡である。検出した主な遺構は、土坑、溝、小穴である。出土遺物は、近世陶磁器、青磁、白磁、染付、土師器、瓦質土器、瓦、銭、石製品である。

1 遺構面検出遺構

S-1 (第7図)

1区中央で検出した円形の土坑で、長軸2.8m・短軸1.7m、深さは最深部で0.14mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第8図)

1、2は陶器の碗で、内外面に施釉し、貫入が入る。3は肥前系磁器の染付碗で、外面に草文を描く。4から7は肥前系磁器の染付皿で蛇の目高台を呈する。4は外面に唐草文、見込みに草花文を描く。5は輪花皿で口縁部に口紅を施し、見込みに山水文を描く。6は内面口縁部に草文と3条の圏線、見込みに1条の圏線、高台内に1条の圏線を描く。7の器形は八角と思われ、区画ごとに染付による線が描かれる。見込みに葉文と2条の圏線を描く。8は肥前系磁器の染付蓋で内面天井部に1条の圏線、外面に草文を描く。9は肥前系磁器の染付蓋で内面天井部に「寿」の文字を描き、つまみ端部は釉剥ぎされる。10は陶器の壺である。外面に明赤褐色の釉薬を施釉する。11は大黒天と考えられる土人形で、型合わせ成形により作成されている。

S-2 (第7図)

1区東寄りの壁面付近で検出した不定形の土坑で、長軸7.6m・短軸7.7m、深さは最深部で0.24mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは西側が比較的急な傾斜を呈する。東側は調査区外に伸びており全容は不明である。

出土遺物 (図版8、第8図)

12は陶器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。

S-3 (第7図)

1区東側で検出した楕円形の小穴で、長軸0.5m・短軸0.2m、深さは最深部で0.1mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

S-4 (第7図)

1区西側で検出した円形の小穴で、長軸0.5m・短軸0.4m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第8図)

13は砥石で使用痕が残る。石材は砂岩で天草石の可能性はある。

S-5 (第7図)

1区西側で検出した不定形の土坑で、長軸0.57m・短軸0.3m以上、深さは最深部で0.08mを測る。埋土は明灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。西側は調査区外へ広がっているため、全容は不明である。

S-6 (第7図)

1区北東側で検出した不定形の土坑で、長軸0.64m・短軸0.58m、深さは最深部で0.05mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

S-7 (第7図)

1区北東側で検出した楕円形の土坑で、長軸0.64m・短軸0.44m、深さは最深部で0.11mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

S-8 (第7図)

1区北西側で検出した不定形の小穴で、長軸0.44m・短軸0.37m、深さは最深部で0.09mを測る。埋土は明灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

S-9 (第7図)

1区北東側で検出した不定形の土坑で、長軸1.55m・短軸0.96m、深さは最深部で0.21mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (第10図)

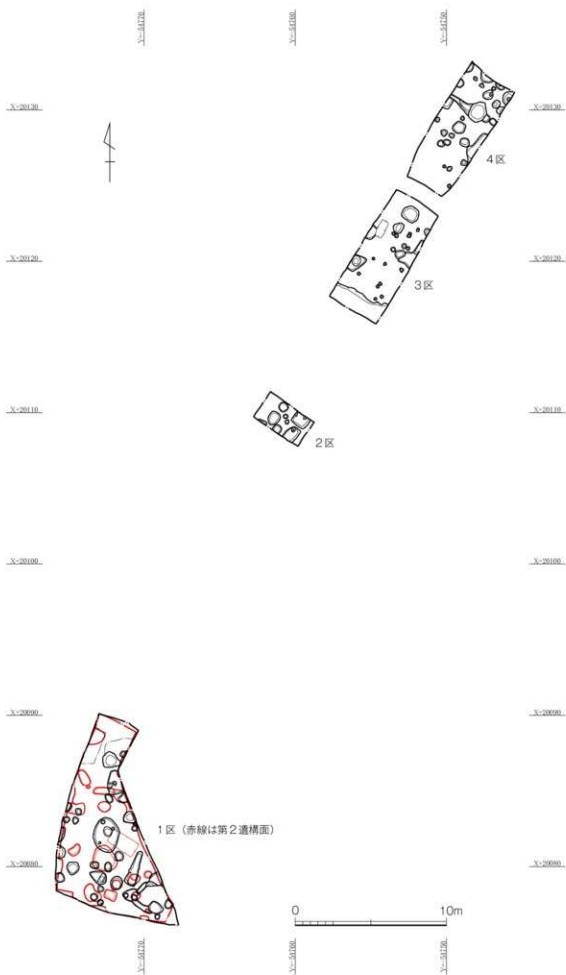
14は陶器の碗で京焼風、底部は露胎、内外面に貫入が見られる。

S-10出土遺物 (第10図)

15は肥前系磁器の染付碗で、外面に文様を描き、見込みは蛇の目釉剥ぎされる。畳付は釉剥ぎされ、若干の砂が付着する。

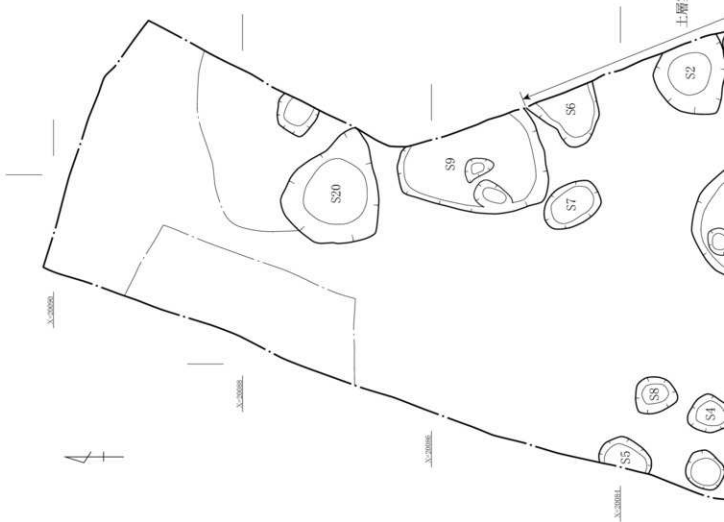
S-11 (第9図)

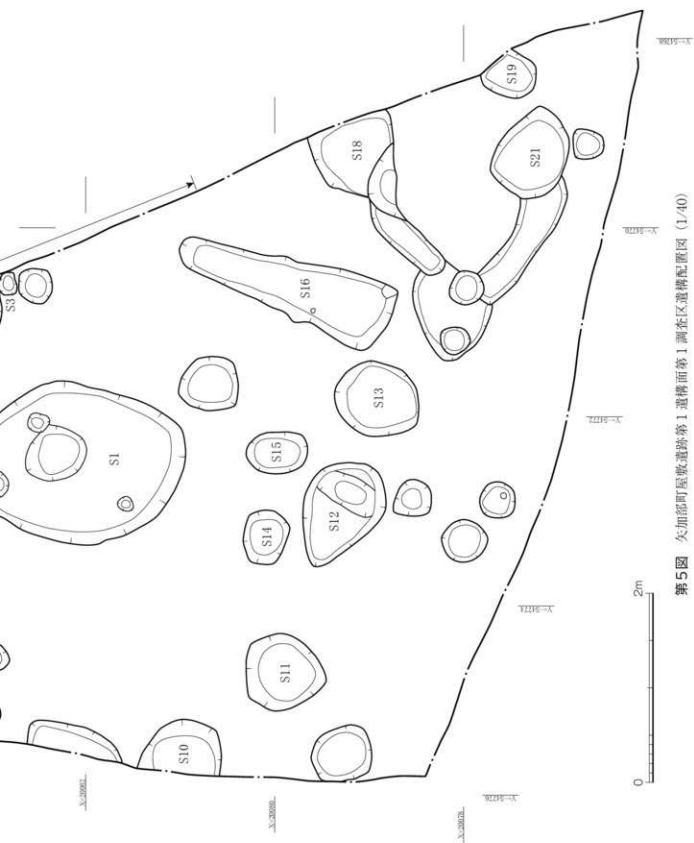
1区西側で検出した不定形の土坑で、長軸0.87m・短軸0.57m以上、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は灰色粘土で、底面は中央に向かって若干深くなり、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。



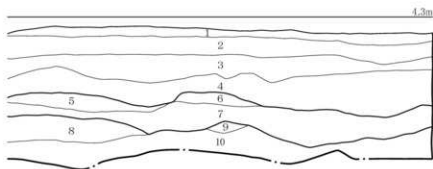
第4図 矢加部町屋敷遺跡遺構配置図 (1/250)

土層表測範圍





第5図 矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第1調査区遺構配置図 (1/40)



- | | |
|------------|---|
| 1. 褐色土（表土） | しまりが強い。 |
| 2. 淡褐色土 | しまりが強い。 |
| 3. 淡黄灰色粘土 | 橙色粒状に固形化した金属質が沈着。一部に焦土、貝殻片を含む。 |
| 4. 淡黄灰色粘土 | ややしまりが弱い。茶褐色粒状に固形化した金属質が沈着。近代の陶磁片を出土。第1遺構面。 |
| 5. 灰色粘土 | しまりが強い。粒状の炭化物を含む。 |
| 6. 灰色粘土 | しまりは普通。粒状の炭化物。軟質土器片の摩耗した物を含む。 |
| 7. 暗黄灰色粘土 | しまりが強い。橙色粒状に固形化した金属質が沈着する。近世陶磁器出土。第2遺構面。 |
| | 褐色粘土がブロック状に含まれる。 |
| 8. 暗黄灰色粘土 | しまりが弱い。橙色粒状に固形化した金属質が沈着する。 |
| 9. 淡褐色粘土 | しまりが弱い。茶色粒状の金属物を多く含む。 |
| 10. 青灰色粘土 | しまりが弱い。粘性が強い。橙色粒状の金属分を含む。 |



第6図 矢加部町屋敷遺跡第1調査区土層図 東側壁面（1/40）

S-12（第9図）

1区南側で検出した不定形の土坑で、長軸1.12m・短軸0.82m、深さは最深部で0.39mを測る。埋土は灰色粘土で、底面は北から南にかけて傾斜しており、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。

出土遺物（図版8、第10図）

16は陶器の鐏鉢で、内外面に暗赤褐色の釉を施釉する。

S-13（第9図）

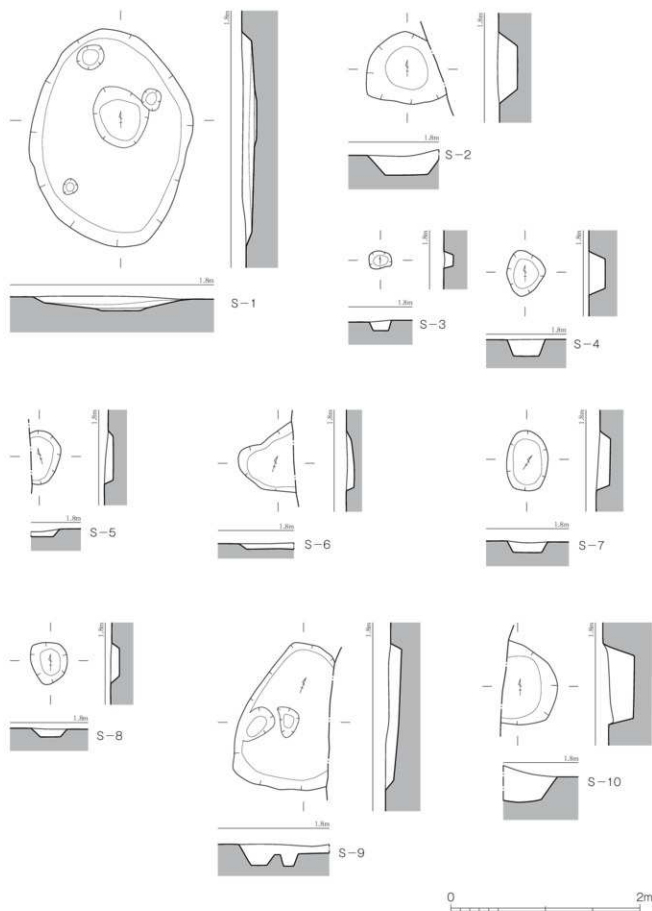
1区南側で検出した円形の土坑で、長軸0.88m・短軸0.78m、深さは最深部で0.35mを測る。埋土は灰色粘土で、底面は中央に向かって傾斜しており、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。

出土遺物（図版8、第10図）

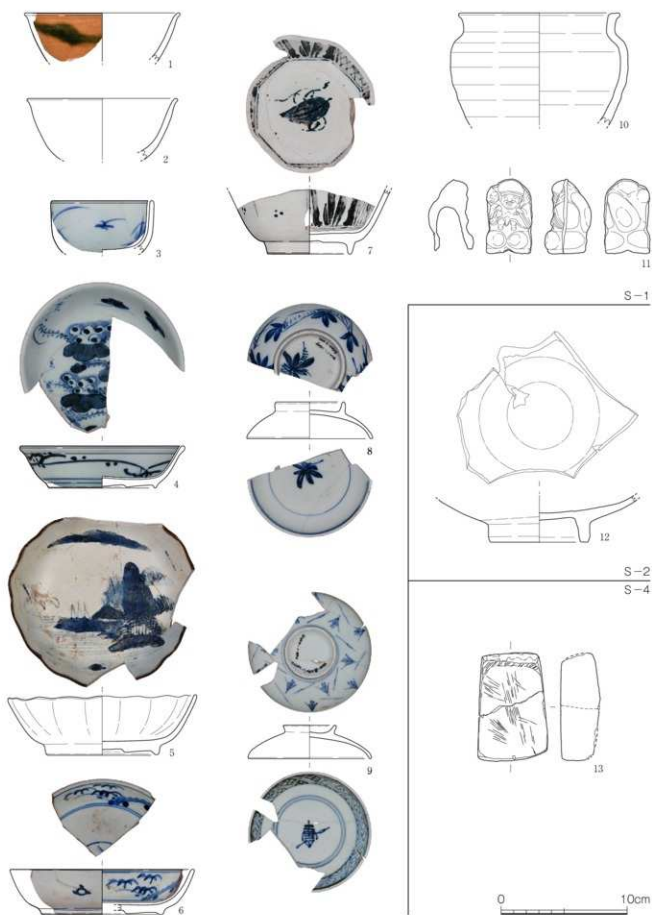
17は白磁の輪花皿で、蛇の目高台を呈する。

S-14（第9図）

1区南側中央部で検出した楕円形の土坑で、長軸0.58m・短軸0.48m、深さは最深部で0.36mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は西側から東側に向かって傾斜しており、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。



第7図 S-1からS-10実測図 (1/40)



第8図 S-1・2・4 出土遺物実測図 (1/3)

S-15 (第9図)

1区南側中央部で検出した楕円形の土坑で、長軸0.66m・短軸0.44m、深さは最深部で0.38mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

S-16 (第9図)

1区南東側で検出した楕円形の溝で、長軸2.35m・短軸0.65m、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は西側から東側にかけて若干傾斜し、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版9、第10～11図)

18から20は肥前系磁器の碗である。18と19は染付の小碗で、18は外面に文様を描く。19は外面に草文とイチチン掛けを施し、口縁部は外反する。20は外面に文様を描き、見込みは蛇の目軸剥ぎが施される。21から24は肥前系磁器の染付皿で、21は内面に草花文と1条の圏線を描き、外面に草文を3条の圏線を描く。22は口縁部に口紅を施し、見込みに2条の圏線、内面口縁部に草花文を描く。23は、見込み2条の圏線と文様を描く。24は内面に草花文を描き、外面に草花文と2条の圏線を描く。25は色絵磁器の皿で、色絵の剥がれが顕著であるが、剥がれ痕から見込み部に鶴が描かれていたと思われる。26は肥前系磁器の染付蓋である。見込みに花文と1条の圏線、内面口縁部付近に簡略した渦文と3条の圏線を描く。27は肥前系磁器の染付蓋付鉢で、外面に松、竹を描く。28から30は陶器の蓋で、28は白化粧土によるイチチン掛けを施す。29は外面に金彩を施し、穿孔がある。30は薄手で外面には飛び鉤が3段に施される。外面中位のみ釉を剥いでいる。内面は薄く白化粧土を施した可能性がある。31は陶器の甕で外面に縄状突起を施し、外面下部には砂が付着する。32は陶器の鉢で、内面は全面に白化粧土を施し、外面は白化粧土を横線状に施す。33は陶器の播鉢で、播目を内面は反時計回り、見込みに一定方向に施す。

S-18 (第18図)

1区東側で検出した不定形の土坑で、長軸0.8m・短軸0.79m、深さは最深部で0.35mを測る。埋土は暗茶色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。遺構の南西側は他の遺構と切りあっており、全体は不明である。

S-19 (第18図)

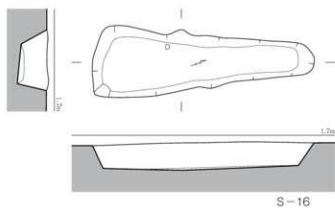
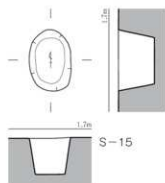
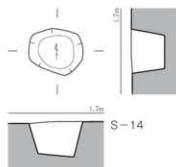
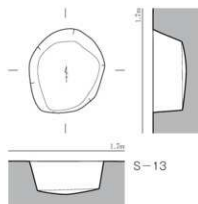
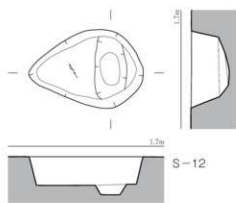
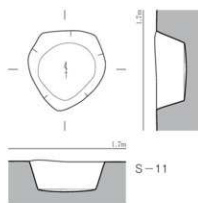
1区南東側で検出した不定形の土坑で、長軸0.58m・短軸0.48m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は暗茶色粘土で、底面は南側が若干落ち込み、北側に向かって水平となる。立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。遺構は調査区外の東側へと延びるため、全体は不明である。

S-20 (第18図)

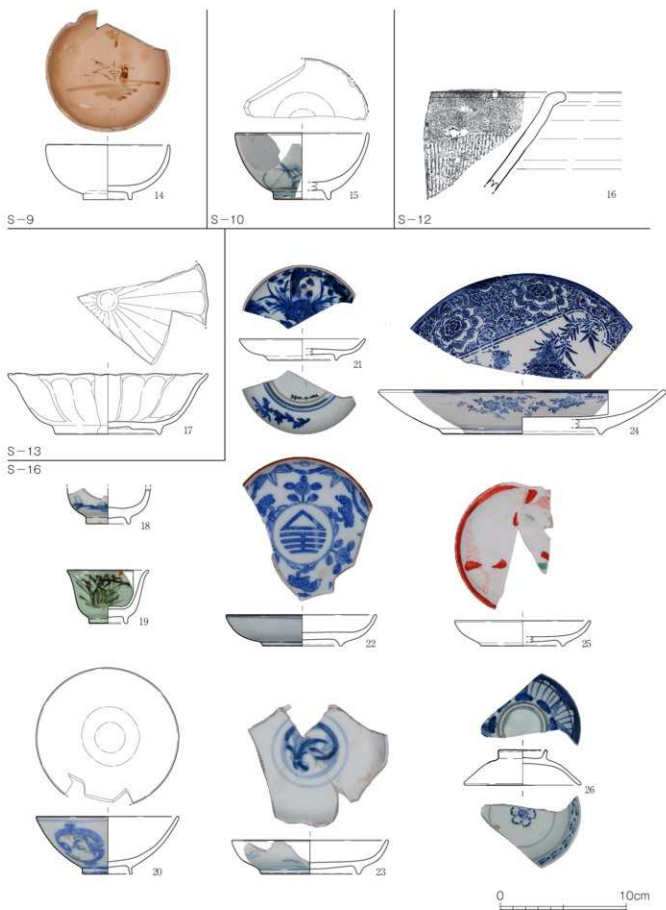
1区北側で検出した不定形の土坑で、長軸1.26m・短軸0.98m、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版9、第12図)

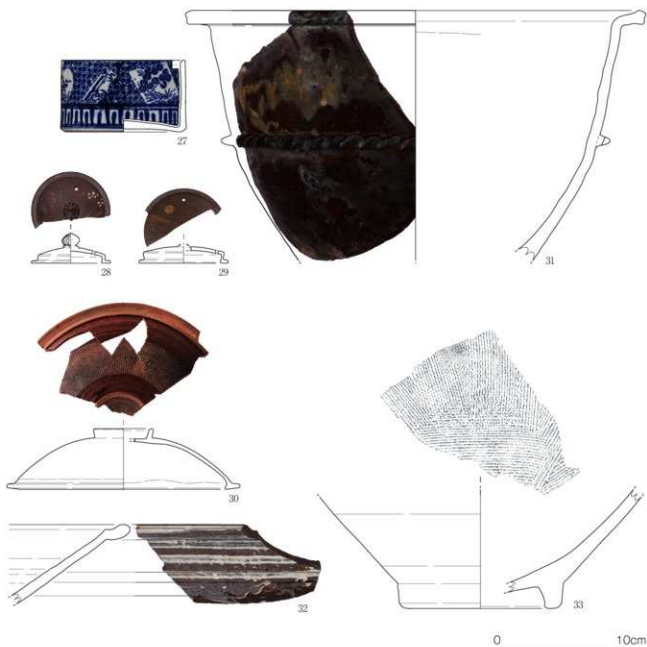
34は肥前系磁器の染付皿で、見込みに五弁花文のコンニャク印判を施文する。高台内にハリ痕が1つ残る。35は陶器の碗で、口縁部は軸剥ぎされる。36は陶器の灯明皿で、外面底部に回転糸切痕



第9図 S-11からS-16実測図 (1/40)



第10図 S-9・10・12・13・16出土遺物実測図 (1/3)



第11図 S-16出土遺物実測図 (1/3)

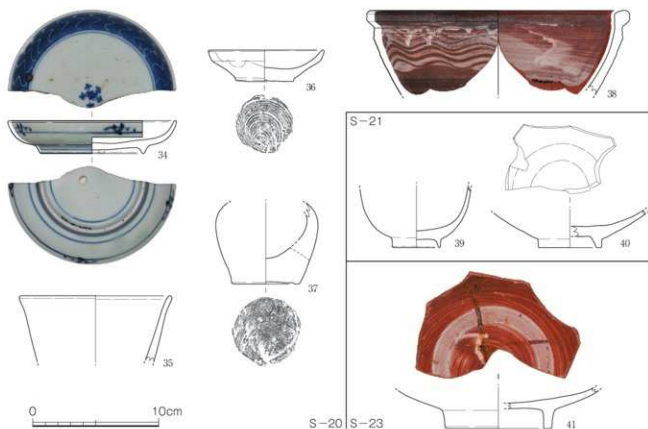
が残る。37は土器の焼塩壺で、外面底部に回転糸切痕が残る。38は陶器の鉢で、内面に刷毛状工具で白化粧土を施し、外面は白化粧土を施したのち波状に掻き取る。

S-21 (第18図)

1区南東側で検出した不定形の土坑で、長軸0.97m・短軸0.74m、深さは最深部で0.24mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は西側から東側にかけて若干傾斜し、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版9、第12図)

39は白磁の碗で、壺付が釉剥ぎされる。40は白磁の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎされ、高台は露胎である。



第12図 S20・21・23出土遺物実測図 (1/3)

S-23出土遺物 (第12図)

41は陶器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎがされる。

S-30 (第18図)

2区南北側で検出した長方形の土坑で、長軸1.8m・短軸0.78m、深さは最深部で0.24mを測る。埋土は暗灰色粘土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりはやや緩やかな傾斜を呈する。遺構は調査区外の北側に延びており、全体は不明である。

S-31出土遺物 (図版9、第20図)

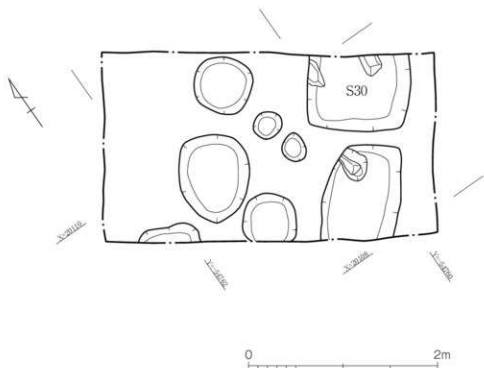
42は肥前系磁器の染付小杯で、外面に草文を描き、高台に鉄釉を施す。43は陶器の播鉢で、外面はタタキ後ナデ調整を施す。播目の単位は8条1単位である。

S-35出土遺物 (第20図)

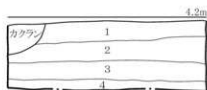
44は肥前系磁器の染付碗で、外面に水烈文等を描く。

S-40 (第18図)

3区南北側で検出した長方形の溝で、長軸3.53m・短軸1.28m、深さは最深部で0.5mを測る。埋土は茶色粘土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりはやや緩やかな傾斜を呈する。遺構は調査区外の東西及び南側に延びており、全体は不明である。



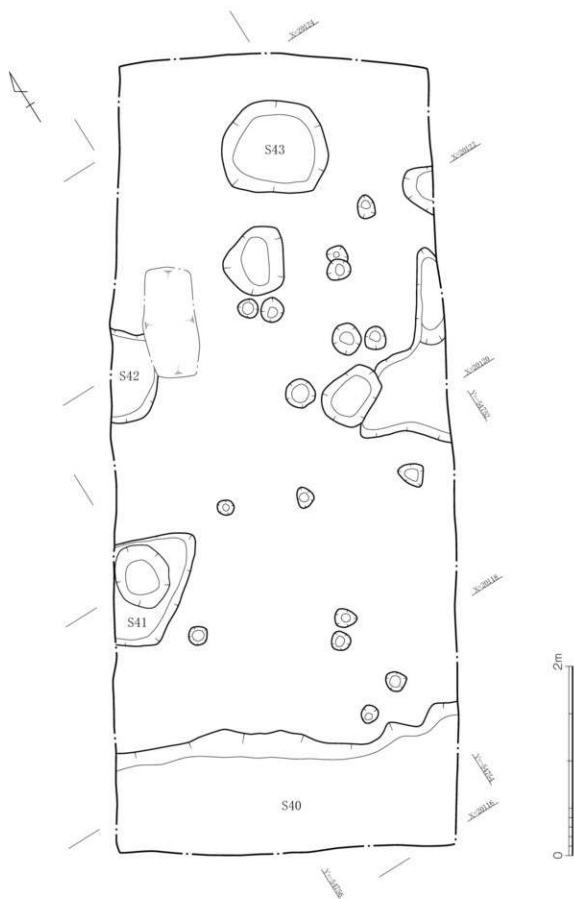
第13図 矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第2調査区遺構配置図 (1/40)



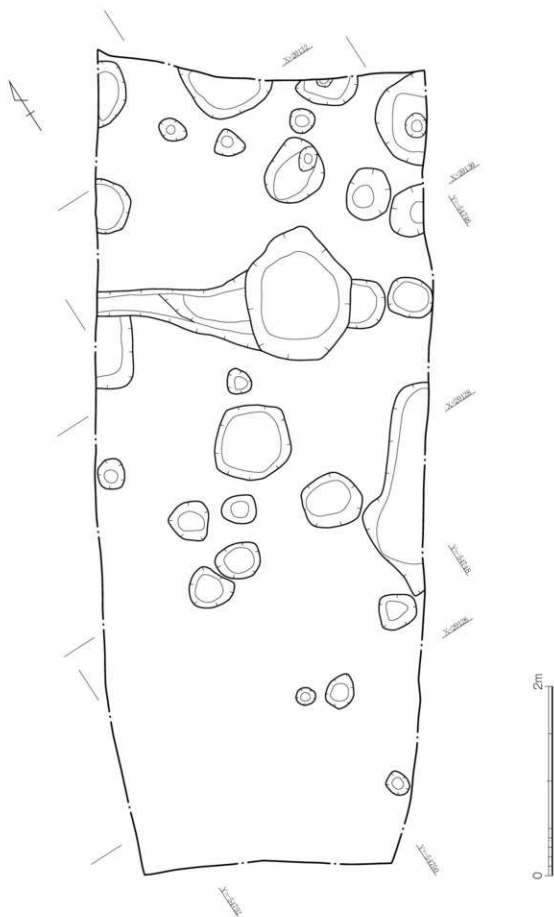
1. 褐色土 (表土)
2. 淡茶色土 しまりが弱い。木の根等を含む。
3. 淡黄褐色粘土 しまりが弱い。近代磁器・軟質土器片を含む。
4. 淡白灰色粘土 茶褐色粒状に固形化した金属質が沈着。わずかに粘性あり。遺構検出面。



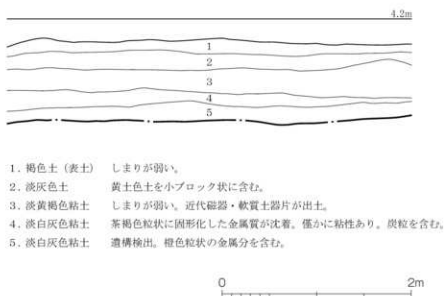
第14図 矢加部町屋敷遺跡第2調査区土層図 西側壁面 (1/40)



第15図 矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第3調査区遺構配置図 (1/40)



第16図 矢加部町屋敷遺跡第1遺構面第4調査区遺構配置図 (1/40)



第17図 矢加部町屋敷遺跡第4調査区土層図 西側壁面（1/40）

S-41（第19図）

3区西側で検出した不定形の土坑で、長軸0.14m・短軸0.77m、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は灰茶色粘土で、底面は西側がテラス状になり平坦で中央の土坑の底面も平坦。立ち上がりはやや緩やかな傾斜を呈する。

S-42（第19図）

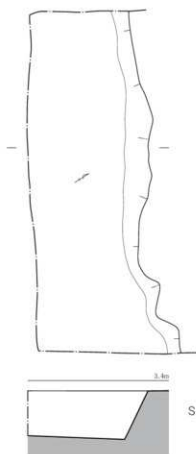
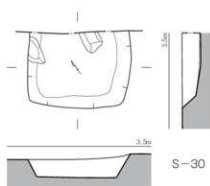
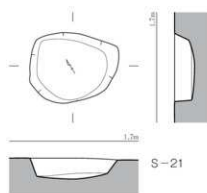
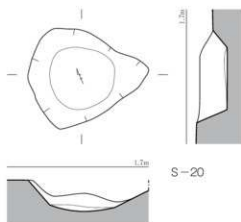
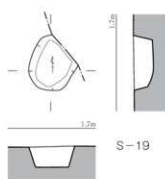
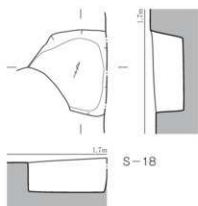
3区西側で検出した不定形の土坑で、長軸0.96m・短軸0.49m、深さは最深部で0.13mを測る。埋土は灰色粘土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりはやや緩やかな傾斜を呈する。遺構の東側は他の遺構と切りあっている。また、遺構は西側に延びているため全容は不明である。

S-43（第19図）

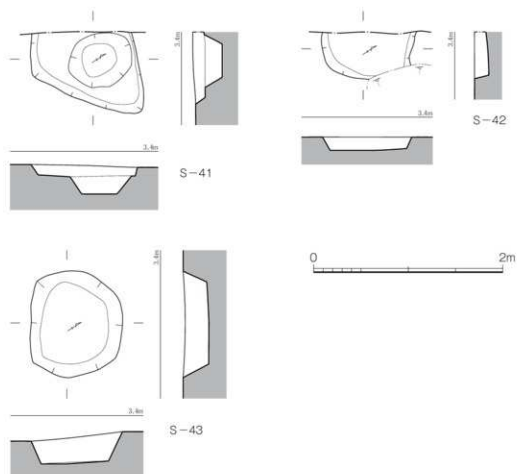
3区北側で検出した不定形の土坑で、長軸1.14m・短軸0.97m、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は黒色土で、底面は全体的に平坦で、立ち上がりはやや急な傾斜を呈する。

出土遺物（図版9、第20図）

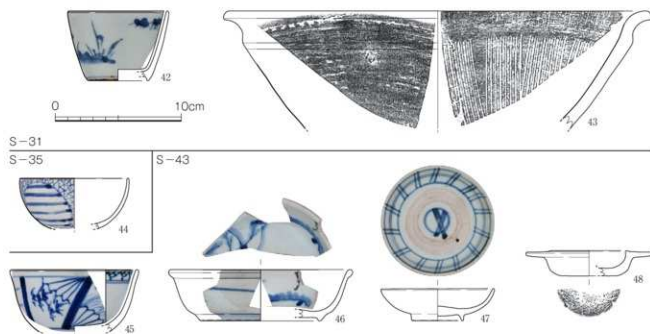
45は肥前系磁器の染付碗で、外面に草文等が描かれ、内面口縁部下に文様が帯状に施文される。46と47は肥前系磁器の染付皿である。46は蛇の目高台を呈し、口縁は玉縁の様な形を呈する。47の見込みは蛇の目軸割ぎがされ、内面に二重格子文を描く。48は陶器の蓋で、内面に回転糸切の痕跡が残り、天井部に2条の沈線を施す。



第18図 S-18からS-21・30・40実測図 (1/40)



第19図 S-41からS-43実測図 (1/40)



第20図 S-31・35・43出土遺物実測図 (1/3)

2 その他の出土遺物

第1遺構面包含層出土遺物（第22図）

49は陶器の鉢で、内面に白化粘土による波状文と横線を描き、底部は露胎である。

第3区包含層出土遺物（図版9～10、第22図）

50は青磁の瓶で、畳付は釉剥ぎの後に砂が付着する。51は陶器の蓋で、内面に回転糸切の痕跡が残り、底部は露胎である。52は陶器の土瓶で、ソロバン玉形の体部を呈し底部は露胎である。53は肥前系磁器の染付碗で、外面に山水文と鳥文、2条の圏線を描き、高台内に崩れた「大明年製」と1条の圏線を描く。54は陶器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎ後、朱色の鉄焼の可能性がある化粧土を施す。55は陶器の描鉢で、内面に重なりのある放射状の15条1単位とする描目を施す。

第4区包含層出土遺物（図版10、第22図）

56は肥前系磁器の白磁の小杯で、口縁端部が外反し、畳付は釉剥ぎ後に砂が付着する。57は白磁の碗で、内面及び外面に貫入が入り、畳付は釉剥ぎがされる。58は青磁の鉢で、残りは少ないものの、器形は輪花を呈すると考えられる。59は肥前系磁器の染付碗で、外面に草花文と2条の圏線を描く。60は肥前系磁器の染付碗で、外面に花文を描き、見込みは蛇の目釉剥ぎの後に、砂が付着する。61は肥前系磁器の染付碗で、外面に草花文と2条の圏線、高台内に1条の圏線を描く。62は肥前系磁器の染付碗で外面に山水文と、3条の圏線を描き、高台内に崩れた「大明年製」と1条の圏線を描く。63は陶器の碗で、内面及び外面に貫入が入る。64肥前系磁器の染付皿で、内面に青海波文、外面に3条の圏線を描く。65は陶器の灯明皿で、底部に回転糸切の痕跡が残る。66は陶器の甕で、内面に白化粘土を刷毛目状に施し、底部は露胎する。

第2遺構面直上包含層出土遺物（図版10～11、第23～24図）

67は土器の焼塩壺で、外面底部に回転糸切痕が残る。68は陶器の皿で、外面底部に回転糸切痕が残る。69は陶器の灯明皿で、外面底部には回転糸切痕が残る。70は肥前系陶器の碗で、畳付は釉剥ぎされる。71は陶器の碗で、内面に刷毛状工具により白化粘土を施し、外面は白化粘土で円を描く。72は肥前系陶器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。73は陶器の脚付き皿で、唐津焼と考えられ、高台部に透かしを施す。74は陶器の壺で、胴部に白化粘土で波状文を描く。75は陶器の鉢で、胴部に白化粘土で波状文を描く。76は肥前系陶器の鉢で、内面に白化粘土で波状文を描く。畳付には胎土目が残る、端部には砂が付着する。77から81は肥前系磁器の染付碗である。77は外面に雲と松を描き、高台内に「福」を描く。78は体部外面に1条、高台外面に2条の圏線を描き、高台内に崩れた「大明年製」を描く。79は外面に草文を描く。80は外面に1条の圏線を描き、高台内に崩れた「大明年製」を描く。81は外面に草文を描く。

82は肥前系磁器の染付皿で、内面口縁部に草花文、見込みに2条の圏線と五弁花文を描く。外面に草文を描き、高台内に崩れた「大明年製」を描く。83は肥前系陶器の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎ後、砂が付着する。84は陶器の描鉢で、内面に15条1単位の描目が放射状に施され、見込みに横方向の描目を施す。

試掘調査出土遺物（図版11、第24図）

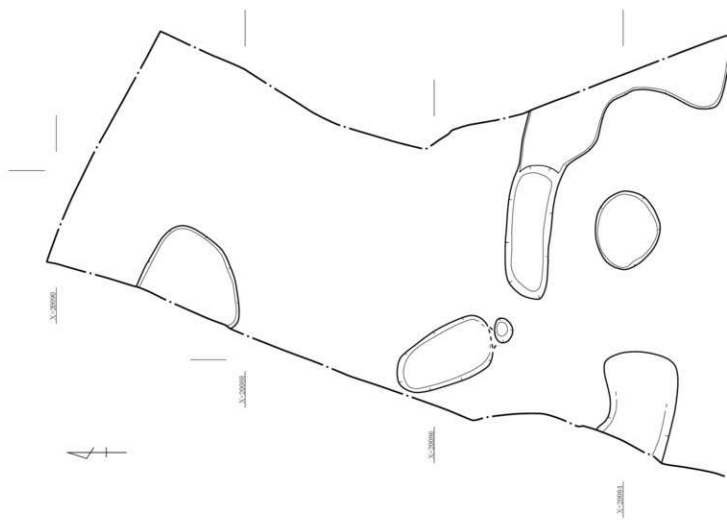
85は陶器の鉢で、内面及び外面は刷毛で鉄軸を施す。また、外面は白化粧土で横線を描く。86は陶器の鉢で、口縁部は玉縁状に膨らみ、高台は蛇の目高台である。87、88は肥前系磁器の染付碗である。87は外面に文様を描く。88は外面に山水文を描く。89は肥前系磁器の染付皿で、内面に二重格子文を描き、口縁部は玉縁状に膨らむ。90は肥前系磁器の染付碗で、内面口縁部に斜格子文を描き、見込みに五弁花文と2条の圈線を描く。高台内に崩れた角「福」を描く。

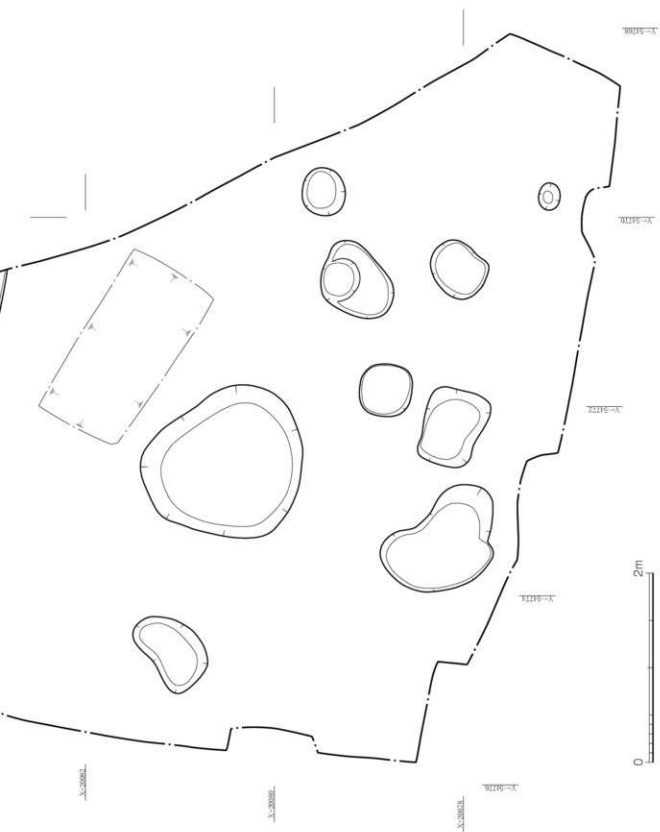
表土出土遺物（図版11、第24～25図）

91、92は肥前系磁器の染付碗である。91は外面に葉文を描く。92は内面口縁部に斜格子文を描き、外面に網目文を描く。93は肥前系磁器の染付鉢で、器形は輪花を呈し、高台は蛇の目高台である。94は肥前系磁器の染付皿で、内面に扇、梅、見込みに五弁花文を描く。高台内面に、崩れた「福」を描く。95は肥前系磁器の染付仏飯器で、外面に蛸唐草文を描く。96は肥前系磁器の染付皿で、内面に水草と魚を描く。高台内にハリ痕が1ヶ所残る。97は肥前系磁器の染付蓋で、つまみ内に「吉」の文字を描く。98は肥前系磁器の染付皿で、内面に波文を描く。99は陶器の鉢で、内面口縁部及び外面に白化粧土を施す。100は安山岩製の臼である。

銭（図版11、第26図）

101から104は銅銭で、寛永通宝である。101は文銭である。105は大正14年の十銭である。



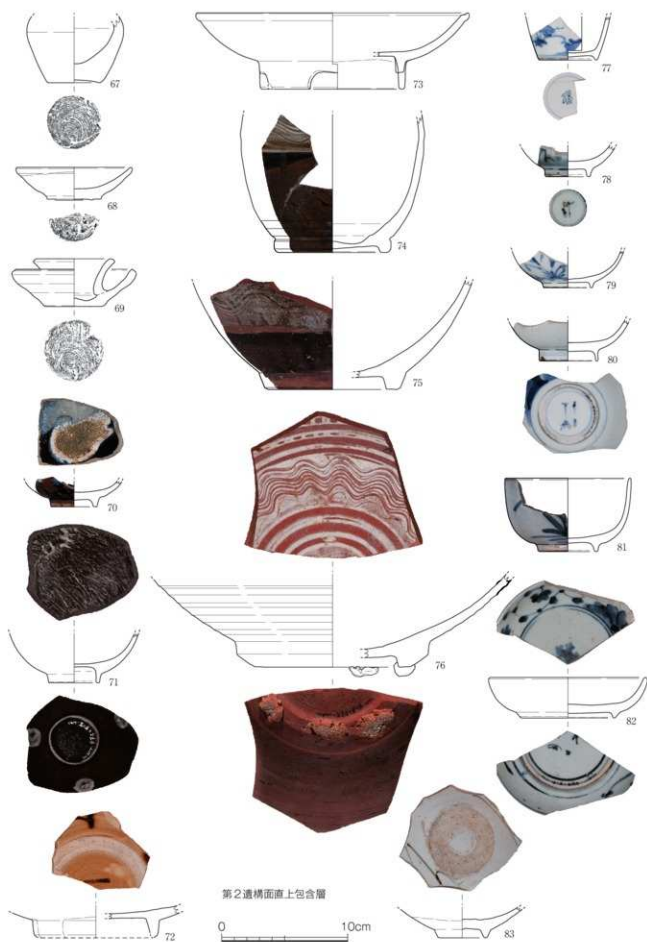


第21圖 矢加部町屋敷遺跡第2選構面第1調査区遺構配置図 (1/40)

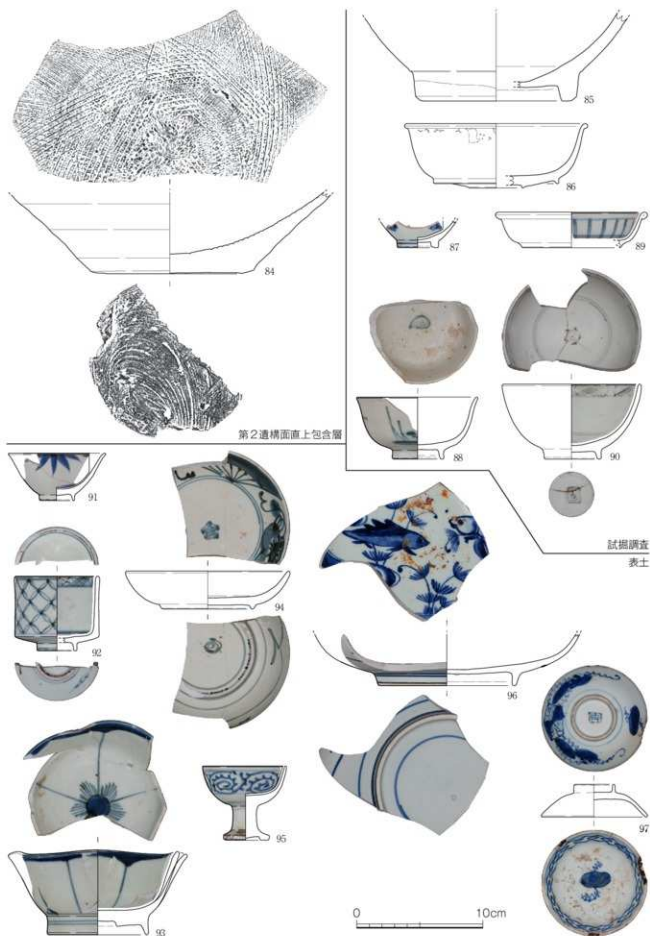


第22図 その他の出土遺物実測図① (1/3)

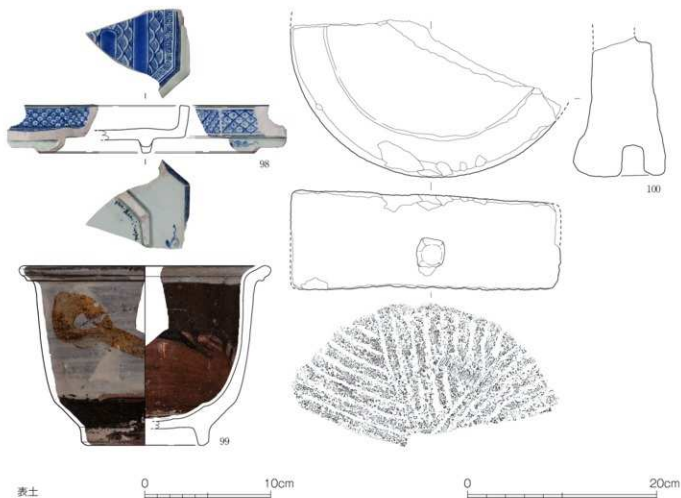
0 10cm



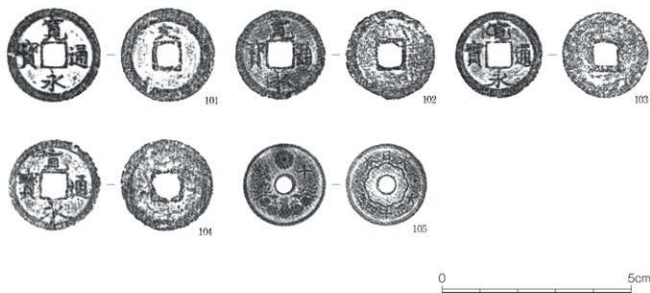
第23図 その他の出土遺物実測図② (1/3)



第24図 その他の出土遺物実測図③ (1/3)



第25図 その他の出土遺物実測図④ (98・99は1/3、100は1/4)



第26図 出土銭実測図 (1/1)

IV 総括

本件の矢加部町屋敷遺跡は、一級河川筑後川下流域左岸の沖積地に位置する。近世の往還道「久留米柳川往還」沿線の久留米藩の集落遺跡である。本遺跡は有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴い、平成15年10月の試掘調査により江戸時代の溝や土坑などが確認されたため、周知の埋藏文化財包蔵地となった。

今回は県道久留米柳川線拡幅工事が計画されたことに伴い、県道拡幅部分において遺構の広がりや確認された範囲を対象に発掘調査を実施した。調査面積は交差点の改良部分にあたるⅠ区が最も広く、遺構の検出も第1遺構面と第2遺構面の2面に渡り遺構を検出することができた。検出した遺構は、調査区の関係上それ程多くはないが、小穴や土坑、溝と考えられる遺構を検出した。出土した遺物については、近世から近代にかけての肥前系の陶磁器を多く出土すると共に、寛永通宝等の銭等も僅かに出土した。

本遺跡が隣接する「久留米柳川往還」は、慶長5（1600）年、関ヶ原の戦い後、筑後柳川に入封した田中吉政が、本城とした柳川城と領内に配置した九支城（久留米・福島・榎津・城島・赤司・黒木・松延・鷹尾・中島）とを結ぶ交通路として整備した。これら九つのうち、柳川城と久留米城を結ぶ道が「久留米柳川往還」である。「久留米柳川往還」の整備について、田中吉政が国元の三奉行に充てた「慶長七年台所入之掟」のなかでは、つぎのような内容を見ることができる。

- 一、やな川よりくるめまでの新道の両わき之ミそ、よこ四尺二ほらせその土八道之うへ中高二をき入念作候様ニその郡代々々より奉行を被相付可被申付候事、

このことから、本城である柳川と最も重要な支城が置かれた久留米の間に「新道」を慶長7（1602）年に造成していることがわかる。なお、上記の文献の中に記載される、往還脇の溝については今回の調査では確認することができなかった。これは、今回の調査範囲が狭いために確認できなかったものか、現在の県道側に位置するものか詳細は不明である。しかし、当市が過去に久留米柳川往還沿線にあたる、上町遺跡の発掘調査では文献の記載にある様な溝を検出している。そのため、本調査地点に隣接する溝が存在する可能性は極めて高いと考える。

田中家は2代目の藩主忠政の没後に断絶し、後に筑後国は柳川藩と久留米藩に分かれるものの、久留米柳川往還は柳川と久留米の城下を結ぶ重要な道として利用され、柳川藩主の参勤交代では瀬高方面へ通じる街道もしくはこの道が利用された。また現在においても、柳川市と久留米市を繋ぐ重要な幹線道路として機能している。

今回の調査地点は、柳川市の中でも旧久留米藩領に位置する場所での発掘調査であったため、柳川藩と久留米藩との違いを示す遺構や遺物の検出及び出土を念頭において調査を実施した。しかし、検出した遺構や、出土した遺物から柳川藩との明確な違いはなかった。しかし、本調査では柳川市内に所在する旧久留米藩領の様相を知る手掛かりになったと考える。

－参考文献－

- 『九州陶磁器の編年—九州陶磁学会10周年記念—』 2000 九州陶磁学会
- 『新・柳川明証図会』 柳川市史特別編 2002
- 『京町遺跡』 柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会
- 『アクロス福岡文化誌1 街道と宿場町』 2007 アクロス福岡文化誌編纂委員会
- 『矢加部町屋敷遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 2007 福岡県教育委員会
- 『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 2009 福岡県教育委員会
- 『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』 有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 2012 九州歴史資料館

第1表 出土遺物観察表

図番号	器種・ 形状・ 通称名	法量(cm) 目録元	胎の種類・ 胎の特徴	釉薬	調整・成形・ 装飾技法・特徴	蒔絵技法	産地	年代	備考
1	甕	口径12.2 器高14.8 底径7.1	陶器 精良 浅黄釉	明赤黒	内外面貫入。				図01
2	甕	口径11.8 器高14.8 底径7.1	陶器 精良 浅黄釉	明赤黒	内外面貫入。				図03
3	甕	口径17.8 器高14.1 底径7.1	染付 精良 灰白	灰白	外面に草文を描く。		肥前		図03
4	皿	口径12.8 器高3.3 底径6.4	染付 精良 灰白	灰白		蛇の目高台	肥前	18c後～19c	図05
5	皿	口径14.7 器高4.5 底径8.6	染付 精良 灰白	灰白	輪花。 見込みに口文を施す。 口縁部に口紅を施す。	蛇の目高台	肥前	19c前	図08
6	皿	口径14.4 器高3.7 底径6.4	染付 精良 灰白	灰白	内面口縁部に草文と3条の襷縞を描く。 見込みに1条の襷縞を描く。 高台内に1条の襷縞を描く。内外面貫入。	蛇の目高台	肥前	18c後～19c	図02
7	皿	口径17.8 器高15.1 底径10.4	染付 精良 灰白	灰白	器形は八角とされる。図鑑ごとに寄託による線が入る。 見込みに草文と2条の襷縞を描く。	蛇の目高台	肥前	18c後～19c	図05
8	蓋	口径9.9 器高2.9 底径5.3	染付 精良 灰白	灰白	内面天字部に1条の襷縞を描く。 外面に草文を描く。	つまみ縁部輪割至	肥前		図05
9	蓋	口径9.6 器高2.7 底径4.1	染付 精良 灰白	灰白	内面天字部に「寿」と2条の襷縞を描く。	つまみ縁部輪割至	肥前		図07
10	壺	口径12.6 器高8.9 底径7.1	陶器 精良 灰赤	明赤黒					図02
11	土人型 大黒天少	最大幅3.7 最大径5.9 最大受3.7	土製品 1mmの透明の砂粒を含む	にぶい・橙	型合わせ成形。				図10
12	皿	口径11.8 器高3.7 底径7.7	陶器 精良 にぶい・橙	灰黒		見込み蛇の目輪割至 底部露胎		18c	図03
13	磁石	口径5.5 器高6.6 底径3.1	砂粒(天草石)	-	2582g				図09
14	甕	口径9.5 器高4.4 底径3.9	陶器 精良 浅黄釉	明赤黒	内外面貫入。		京焼風	17c	図08
15	甕	口径10.4 器高5.3 底径4.2	染付 精良 灰白	灰白		見込み蛇の目輪割至 器付輪割至。器下の砂付着	肥前		図04
16	磁鉢	口径17.8 器高7.8 底径7.1	1～2mmの白・黒の砂粒を含む にぶい・赤黒	暗赤黒				17c	図01
17	皿	口径15.6 器高4.8 底径8.3	白釉	灰白	輪花。	蛇の目高台		18c後～19c	図01
18	甕	口径12.8 器高12.0 底径7.4	染付 精良 灰白	灰白		器付輪割至	肥前		図04
19	甕	口径14.4 器高4.7 底径1.8	染付 精良 灰白	明赤・緑・灰	外面に草文とイチョウ割けを施す。 口縁部は外反する。	器付輪割至。砂付着	肥前		図06
20	甕	口径10.1 器高4.6 底径6.7	染付 精良 灰白	灰白		見込み蛇の目輪割至 器付輪割至	肥前	18c	図09
21	皿	口径9.8 器高1.2 底径6.4	染付 精良 灰白	灰白	内面に草文と1条の襷縞を描く。 外面に草文と3条の襷縞を描く。	器付輪割至	肥前		図03
22	皿	口径11.7 器高2.5 底径7.7	染付 精良 灰白	灰白	口縁部に口紅を施す。 見込みに2条の襷縞。内面口縁部に草文を描く。 外面に3条。高台内に1条の襷縞を描く。	器付輪割至	肥前	18c～19c	図05
23	皿	口径12.5 器高2.7 底径7.7	染付 精良 灰白	灰白	内面口縁部に1条の襷縞。見込みに2条の襷縞を描く。 外面に2条。高台内に1条の襷縞を描く。	器付輪割至	肥前		図06
24	皿	口径22.4 器高3.5 底径12.4	染付 精良 灰白	灰白	内面に草文文を描く。 外面に草文と2条の襷縞を描く。	器付輪割至		18c～19c	図03
25	皿	口径10.7 器高2.9 底径6.6	色絵 精良 灰白	灰白	色絵の割けが困難であるが。割けが裏から 見込みに施されていいたと思われる。	器付輪割至	明治後期		図05
26	蓋	口径9.4 器高3.8 底径3.6	染付 精良 灰赤	明赤黒	見込みに花文と1条の襷縞を描く。 内面に施した渦文と3条の襷縞を描く。	つまみ縁部輪割至	肥前		図04
27	蓋付鉢	口径9.7 器高3.7 底径9.1	染付 精良 灰白	灰白	外面に松、竹を描く。	口縁部と底部輪割至 底部端には砂付着	肥前	18c～19c	図06
28	蓋	口径14.2 器高2.4 底径-	陶器 精良 灰黒	灰黒	白化釉上でイチョウ割けを施す。 金彩すは「漆風竹」のみ。				図05
29	蓋	口径7.1 器高1.3 底径-	陶器 精良 灰赤	黒灰	金彩を施す。 金彩あり。				図04
30	蓋	口径18.5 器高4.8 底径15.5	陶器 精良 にぶい・橙	赤黒	湯子で底部には噴き面が段に及び施される。 底部中央のみ輪を削いでいる。 外面は厚く白化釉を施した。				
31	壺	口径25.4 器高19.8 底径-	陶器 精良 灰赤	暗赤黒	外面に縄状突起を施す。	外面下部に砂付着		17c?	図01
32	鉢	口径11.8 器高6.3 底径-	陶器 精良 灰黒	灰白	内面に白化釉土を全面に施す。 外面に白化釉土を條割状に引く。			18c	図01
33	磁鉢	口径11.8 器高6.3 底径11.8	陶器 精良 にぶい・赤黒	暗赤黒	器口を内面には反時計回り。 見込みにば一定方向に入る。	高台に砂付着		18c後～19c	図01
34	皿	口径13.2 器高2.6 底径6.3	染付 精良 灰白	灰白	見込みに花卉文。	高台内にハリ重1つ 器付輪割至	肥前	17c後～18c	図05
35	甕	口径11.8 器高5.2 底径-	染付 精良 灰赤	浅黄		口縁部輪割至			図03
36	灯明皿	口径9.9 器高2.5 底径4.6	陶器 精良 赤黒	暗赤灰	底面彫刻施す。			17c後～18c	図06

図番号	遺構 形状・ 透視図	法量 (cm) 目録法	胎の種類 胎の材料	軸	調整・成形・装飾技法・特徴	装飾技法	産地	年代	備考
37	塊状 底径5.3	11径: 10.5 底径5.3	土器 胎土 1~2mmの赤・黒の砂粒を含む	-	底部回転成形。				図0.6
38	鉢 底径6.5	11径: 10.5 底径6.5	陶器 胎土 に白い赤黒	に白い赤黒	内面に白化粘土を縦毛状工具で施す。 外面は白化粘土を施したのち炭灰に焼き取る。			18c	図0.3
39	碗 底径5.6	11径: 10.5 底径5.6	白磁 胎土 白	白		畳付輪割ぎ			図0.4
40	皿 底径5.0	11径: 10.5 底径5.0	白磁 胎土 白	白		見込み丸の目輪割ぎ 底底磨削			図0.3
41	皿 底径8.2	11径: 10.5 底径8.2	陶器 胎土 白	白		見込み丸の目輪割ぎ		18c~19c	図0.3
42	碗 底径5.5	11径: 10.5 底径5.5	金付 胎土 白	明緑灰	外面に意匠を施す。 高台に黒線を施す。	畳付にわずかに磨付着	肥前		図0.3
43	磁鉢 底径9.9	11径: 10.5 底径9.9	陶器 胎土 白	-	外面はタタキのち十字を施す。 器目は8割単位。			18c	図0.1
44	碗 底径4.0	11径: 10.5 底径4.0	金付 胎土 白	白	外面に赤黒文等を施す。		肥前	18c	図0.2
45	碗 底径4.8	11径: 10.5 底径4.8	金付 胎土 白	白			肥前		図0.3
46	皿 底径9.2	11径: 14.5 底径9.2	金付 胎土 白	明緑灰		蛇の目高台	肥前	18c後~19c	図0.2
47	皿 底径2.6	11径: 8.9 底径2.6	金付 胎土 白	白	内面に二重十字文を施す。	見込み丸の目輪割ぎ 畳付輪割ぎ	肥前		図10
48	蓋 底径4.2	11径: 10.5 底径4.2	陶器 胎土 赤	赤	底部回転成形。 天蓋部に2条の黒線を施す。				図0.4
49	鉢 底径10.8	11径: 10.5 底径10.8	陶器 胎土 赤	白	内面に白化粘土で炭灰文と模様の施す。	底底磨削	肥前	18c	図0.1
50	瓶 底径8.5	11径: 10.5 底径8.5	青磁 胎土 白	明緑灰		畳付輪割ぎのち磨付着			図0.7
51	蓋 底径2.0	11径: 8.8 底径2.0	陶器 胎土 白	黒	底部回転成形。	底底磨削			図0.9
52	瓶 底径10.2	11径: 7.7 底径10.2	陶器 胎土 赤	黒	ソロバン玉形の体部。 底底くぼむ。	底底磨削		18c	図0.7 外面下半部に スス付着
53	碗 底径5.3	11径: 10.5 底径5.3	金付 胎土 白	白	外面に山水文と意匠、2条の黒線を施す。 高台内に施した「大明年印」と1条の黒線を施す。	畳付輪割ぎ	肥前	17c後~18c	図0.5
54	皿 底径4.0	11径: 10.5 底径4.0	陶器 胎土 白	白		底底磨削 見込み丸の目輪割ぎのち 赤色の化粧土を施す		17c	図0.3
55	磁鉢 底径11.6	11径: 10.5 底径11.6	陶器 胎土 赤	赤	内面意匠のある放射状の模印 (15条1単位) を施す。	畳付輪割ぎのち磨付着		18c後~19c	図0.1
56	小杯 底径4.2	11径: 10.5 底径4.2	陶器 胎土 白	白	11割程度が外見する。	畳付輪割ぎのち磨付着	肥前		図0.5
57	碗 底径4.3	11径: 10.5 底径4.3	白磁 胎土 白	白	内外面に貫入。	畳付輪割ぎ			図0.2
58	鉢 底径4.7	11径: 10.5 底径4.7	青磁 胎土 白	明緑灰	残存は少ないが輪花形と思われる。 内面に斜め方向のヘラ彫りが見られる。	畳付輪割ぎ			図0.4
59	碗 底径4.1	11径: 10.5 底径4.1	金付 胎土 白	白	外面に草花文と2条の黒線を施す。	畳付輪割ぎのち磨付着	肥前		図0.4
60	碗 底径4.3	11径: 10.5 底径4.3	陶器 胎土 白	白	外面に花文。	畳付輪割ぎ 見込み丸の目輪割ぎのち 磨付着	肥前	18c	図0.5
61	碗 底径4.8	11径: 10.5 底径4.8	金付 胎土 白	白	外面に草花文と2条の黒線を施す。 高台内に1条の黒線を施す。	畳付輪割ぎのち磨付着	肥前	17c後~18c	図0.5
62	碗 底径4.2	11径: 10.5 底径4.2	金付 胎土 白	明緑灰	外面に山水文と3条の黒線を施す。 高台内に施した「大明年印」と1条の黒線を施す。	畳付輪割ぎ	肥前	17c後~18c	図0.5
63	碗 底径2.9	11径: 10.5 底径2.9	陶器 胎土 白	に白い赤	内外面に貫入。	底底磨削	伊予		図0.2
64	皿 底径11.6	11径: 10.5 底径11.6	金付 胎土 白	明緑灰	内面に青海波文を施す。 外面に文様と3条の黒線を施す。 高台内に1条の黒線を施す。	畳付輪割ぎ	肥前	18c後~19c	図0.1
65	灯明皿 底径3.8	11径: 10.5 底径3.8	陶器 胎土 白	明緑灰	底部回転成形。	底底磨削		18c	図0.5
66	壺 底径12.8	11径: 10.5 底径12.8	陶器 胎土 白	灰赤	内面に白化粘土を縦毛状に施す。	底底磨削			図0.1
67	塊状 底径4.2	11径: 10.5 底径4.2	土器 胎土 1mm以下の長英、石英を含む	浅黄緑	底部回転成形。				図0.5
68	皿 底径2.6	11径: 10.5 底径2.6	陶器 胎土 白	黒	底部回転成形。	底底磨削		17c後~18c	図0.4
69	灯明皿 底径3.8	11径: 10.5 底径3.8	陶器 胎土 赤	に白い赤黒	底部回転成形。	底底磨削			図0.6 内面にスス付 着
70	碗 底径3.6	11径: 10.5 底径3.6	陶器 胎土 白	に白い赤黒		畳付輪割ぎ	肥前		図0.4
71	碗 底径3.9	11径: 10.5 底径3.9	陶器 胎土 白	白	内面に縦毛状工具により白化粘土を施す。 外面に白化粘土で同文を施す。	畳付輪割ぎ		18c	図0.6
72	皿 底径9.2	11径: 10.5 底径9.2	陶器 胎土 白	に白い赤黒	見込みに鉄粒があるが欠損により詳細不明。	底底磨削 見込み丸の目輪割ぎ	肥前	18c後~19c	図0.1

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) 寸法	胎土の種類 特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	蒔絵技法	産地	年代	備考
73	脚付き皿	口径22.4 底径11.2	陶器 精良 灰白	にぶい黄	高台部に浅くしあり。 内外面人。	高台内蒔絵	香津		図04
74	香	口径11.9 底径6.7	陶器 精良 灰白	黒黒	胴部に白化粧土で流状文を描く。	香付輪割至		17c後～18c前	図02
75	鉢	口径17.9 底径8.7	陶器 精良 にぶい赤黒	灰白	胴部に白化粧土で流状文を描く。	底部蒔絵		18c	図01
76	鉢	口径17.9 底径10.5	陶器 精良 にぶい赤黒	灰白	内面に白化粧土で流状文と横線等を描く。	香付に胎土目があり 胴部には砂が付着している	肥前	18c	図02
77	碗	口径14.0 底径6.5	陶器 精良 灰白	灰白	外面に窓(窓?)に松と2条の横線を描く。 高台内に「松」と1条の横線を描く。	香付輪割至	肥前	18c前	図05
78	碗	口径12.9 底径5.4	陶器 精良 灰白	灰白	外面に「松」、高台内に2条の横線を描く。 高台内に施した「大明年景」。	香付砂付着	肥前	18c	図04
79	碗	口径12.9 底径5.9	陶器 精良 灰白	灰白	外面に草文を描く。	香付輪割至	肥前		図02
80	碗	口径12.9 底径6.6	陶器 精良 灰白	灰白	外面の香付は欠損により不明。 外面に3条、高台内に1条の横線を描く。 高台内に施した「大明年景」。	香付輪割至	肥前	17c後～18c前	図05
81	碗	口径12.9 底径6.4	陶器 精良 灰白	灰白	外面に草文を描く。 内外面に貫入。	香付輪割至	肥前	18c	図05
82	皿	口径10.9 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	内面12線部に草文、見込みに2条の横線と5本花文を描く。 外面に草文と1条の横線、外面高台部に2条の横線を描く。 高台内に施した「大明年景」。	香付輪割至	肥前	17c末～18c	図02
83	皿	口径12.4 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	見込みに香付があるが欠損により詳細不明。	底部蒔絵 見込みに松の目輪割至の砂付着	肥前	18c	図05
84	飯鉢	口径12.9 底径6.6	陶器 精良 灰白	にぶい赤黒	内面に横線と目輪(15条1条部)。 見込みに横方向の目輪を描く。 底部部破れ。		肥前	17c	図03
85	鉢	口径12.9 底径11.8	陶器 精良 灰白	赤灰	内外面に鉄輪を縦文で施す。 外面に白化粧土で横線を描く。	高台部蒔絵 見込みに砂付着		18c	図02
86	鉢	口径14.0 底径6.6	陶器 精良 灰白	灰白	口縁部は玉縁状に彫らむ。	蛇の目高台		19c	図04
87	碗	口径12.1 底径6.1	陶器 精良 灰白	灰白	外面に文様と2条の横線を描く。	香付輪割至	肥前		図02
88	碗	口径12.9 底径5.9	陶器 精良 灰白	灰白	見込みに文様を描く。 外面に山水文を描く。	香付輪割至	肥前		図05
89	皿	口径11.6 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	内面に二重横文を描く。 口縁部は玉縁状に彫らむ。	香付輪割至	肥前	19c	図01
90	碗	口径10.8 底径5.9	陶器 精良 灰白	明オリ灰白	内面口縁部に斜格子文を描く。 見込みに5本花文と2条の横線を描く。 高台内に施した角「上」。	香付輪割至、砂付着	肥前	18c末～	図05
91	碗	口径12.6 底径3.8	陶器 精良 灰白	灰白	口縁部をやや外反。 外面に草文を描く。	香付輪割至	肥前		図05
92	碗	口径12.6 底径5.4	陶器 精良 灰白	灰白	内面に横線に斜格子文。 見込みに太い1条の横線を描く。 外面に4条の横線と7本花文を描く。	香付輪割至、砂付着	肥前	18c後	図03
93	鉢	口径11.1 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	器全体を花に見立てた模様を配置している。 外面に花文と3条の横線を描く。	蛇の目高台、砂付着。	肥前	19c	図05
94	皿	口径12.8 底径3.0	陶器 精良 灰白	灰白	内面口縁部に横と輪、見込みに5本花文と2条の横線を描く。 外面に文様と3条の横線を描く。 高台内に施した「上」と1条の横線を描く。	香付輪割至	肥前	18c～	図04
95	仏壇	口径12.9 底径3.6	陶器 精良 灰白	灰白	外面に横線と草文と4条の横線を描く。	底部蒔絵	肥前		図07
96	皿	口径11.1 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	内面に水雲と鳥を描く。 外面に文様と4条の横線を描く。 高台内に1条の横線を描く。	香付輪割至 高台内にすり肌1つ	肥前	18c	図05
97	蓋	口径13.0 底径6.6	陶器 精良 灰白	灰白	内面に雲文と4条の横線、外面内周部に文様を描く。 外面に3条の横線、つまみ内に角「上」と1条の横線を描く。	つまみ端部輪割至	肥前		図10 欠損部はすり肌 にススが付着
98	皿	口径12.8 底径5.7	陶器 精良 灰白	灰白	八角部か、高台にはスサシが入る。 内面に雲文、流文を描く。 外面に斜格子文の中心に角と1字を描く。	香付輪割至	肥前		図01
99	鉢	口径19.1 底径14.2	陶器 精良 灰白	灰白	内面口縁部と外面に白化粧土を施す。	香付輪割至、砂付着 見込みに砂付着			図01
100	白	径16.6 底径2.5 厚さ10.6		安山岩	6.3kg		肥前		図04
101	寛永通宝	高さ2.3	銭		裏面に「文」。			寛文8年～	
102	寛永通宝	高さ2.4	銭						
103	寛永通宝	高さ2.4	銭						
104	寛永通宝	高さ2.4	銭						
105	十銭	高さ2.2	銭					大正14年	

圖 版

1 矢加部町屋敷敷遺跡調査区範囲
遠景（北から）



2 矢加部町屋敷敷遺跡調査区範囲
全景（東上から）



3 第1調査区全景（東上から）





4 第2調査区全景（東から）



5 第3調査区全景（東から）



6 第4調査区全景（東から）

7 第1調査区第2遺構面完掘状況（北から）



8 第1調査区第2遺構面完掘状況（南東から）



9 第1調査区東側壁面土層堆積状況（南西から）





10 第2調査区西側壁面土層堆積
状況（東から）



11 第4調査区西側壁面土層堆積
状況（南東から）



12 S-1完掘状況（東から）

13 S-9完掘状況（南西から）



14 S-12完掘状況（東から）



15 S-14完掘状況（北から）





16 S-15完掘状況（南東から）



17 S-31・S-35完掘状況
（西から）



18 S-32完掘状況（南西から）

19 S-34完掘状況（西から）



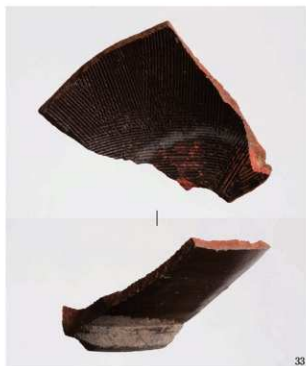
20 S-36完掘状況（西から）



21 S-41完掘状況（北から）







33



35



36



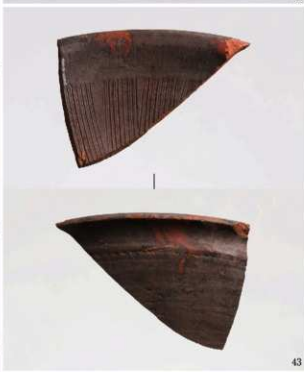
37



39



40



43



48



50





出土遺物④

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やかべまちやしきいせき							
書名	矢加部町屋敷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	柳川市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	橋本清美				加藤悠作 金子史雄			
編集機関	柳川市教育委員会				株式会社 九州文化財研究所			
所在地	〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇ノ〇	〇ノ〇		(㎡)	
やかべまちやしき 矢加部町屋敷 遺跡	ふくおかけんやながわし、やかべ 福岡県柳川市矢加部 669-5他	40207	80147	33° 10′ 46″	130° 24′ 45″	2021.9.1 ～ 2021.11.5	500	県道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢加部町屋敷 遺跡	集落	近世	土坑・溝・小穴		土製品・近世陶磁器・銭		久留米柳川往還	

当遺跡は、有明海に面した筑後平野の南西部、筑後川左岸と矢部川右岸に挟まれた標高3.6m程の沖積平野上に位置する。近世の往還道「久留米柳川往還」沿線の久留米藩領の集落遺跡である。町人町の生活遺構とこれに伴う遺物を確認することができた。遺物は近世陶磁器、土製品、銭貨等が出土している。

矢加部町屋敷遺跡

柳川市文化財調査報告書

第17集

令和5(2023)年3月31日

発行 柳川市教育委員会

〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431

電話 0944-77-8832

印刷 株式会社河田印刷

〒861-4101 熊本県熊本市南区近見8丁目5-105

電話 096-353-1049

